

もんじゅ敷地に活断層か

地形分析、研究者発表

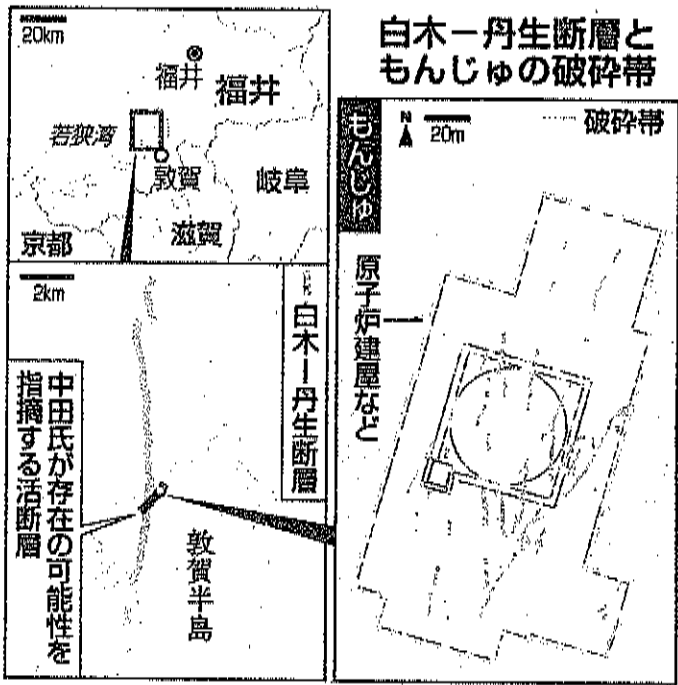
「白木—丹生」枝分かれ可能性

日本原子力研究開発機構の高速増殖原型炉もんじゅ（敦賀市、廃炉作業中）の敷地内に活断層が走っている可能性が高いとの分析を中田高広島大名會教授（愛動地形学）らがまとめ、福岡市で開催中の日本活断層学会で10日、発表した。敷地の西約500メートルを南北に走ると推定された活断層「白木—丹生断層」が枝分かれして敷地内に至る可能性が高いとしている。

原子力機構によると、もんじゅには原子炉などから取り出した核燃料530体以上が保管されている。敷地内に試験研究炉（出力1万キロワット）を新設する計画もある。中田氏は「早急に調査して活断層を確かめるべきだ」としている。

原子炉建屋の真下など、もんじゅの敷地内には破碎帯と呼ばれる断層が多くあり、東京電力福島第1原発事故を受け、原子力規制委員会の有識者調査団が白木—丹生と破碎帯の関係を調

白木—丹生断層ともんじゅの破碎帯



査。破碎帯に活動性は認められないとの評価を2017年にまとめている。

中田氏は、敷地の南西に断層がずれてきたとみられる直線的な形の崖や、断層の動きによって曲がったとみられる谷など、白木—丹生がもんじゅに向かって延びていることを示す地形があると指摘。新しいとみられる地層のずれも見つかっているが、有識者調査団の検討が不十分で、南西から敷地に至る活断層が見落とされているとした。

1980年にももんじゅの建設が申請された際、白木—丹生は活断層ではないとされ、政府は建設を許可。2006年に審査指針が変更されたのを機に、原子力機構は長さ15キロの活断層と修正した。しかし、敷地内の破碎帯とは離れており、影響を及ぼしていないとしている。